

15 医療技術の視点から見た『三国志』

と『三国志演義』の比較

和田 裕 一

論者は、二松学舎大学在学中、中国古代の医学技術史をテーマとして研究し、卒業論文でも中国古代の医療技術の展開について論じた。また、それに先駆けて第九七回日本医史学会学術大会においても、扁鵲、淳于意の望診の技術について発表させていただいた。

今回は、時代の異なる二種類の医学を比較する意味で、『三国志』とそれをもとにしてつくられた『三国志演義』を比較して、そこに見られる主に英雄たちの受けた医療技術について私見を述べたい。

『三国志』と言えば、一般に『三国志演義』を思い浮かべる向きが多い。しかし、『三国志』と『三国志演義』は似て非なるものである。

『三国志』は正統な歴史書である。中国では前の王朝を

滅ぼした王朝が、前の王朝の歴史を編纂するという慣習が長く続いてきた（中華民国でさえ、『清史』を作ったほどである）。『三国志』は三国を統一した晋の歴史家・陳寿が編纂し、六朝・宋の裴松之（はいしょうし）が膨大な註をつけたものである。これは魏・呉・蜀の三国別にまとめられている。いささか余談になるが、最近になって邪馬台国論争がまた活発になっているが、そのなかでもっとも問題となっているのは『三国志』「魏志」東夷伝のなかのいわゆる「魏志倭人伝」の解釈である。その他に補強証拠がないために論争になっているのであって、いかに『三国志』をはじめとする中国の史書が信頼されているかを裏付けるものである。

一方、『三国志演義』は『三国志』をもとにした小説であり、後世の脚色・伝承が加えられ、もとの『三国志』とはかなり記述を異にしている。たとえば、有名な名医・華佗の言行にしても、『三国志演義』ではかなり誇張が見られる。これは、小説という『三国志演義』の特色に他ならないものであって、歴史的に『三国志演義』をもとに三国時代を考証することはできない。だが、『三国志演

義』は、こんにちまで伝えられるほどの名作であり、多くの人を魅了してきた。その中には、『三国志演義』当時のリアリティがあるはずだ。なぜなら、そこにもシリアリティがなければ、それは荒唐無稽として一蹴されたに違いないからである。だから、『三国志演義』には、『三国志演義』の時代の読者が理解・納得できる医療技術の記述が含まれているといえる。

『三国志』および裴松之の引く『華佗別伝』によれば、華佗の症例は二一症例ある。意外に外科手術は少ない。これは、まさしく『三国志演義』が植え付けた強烈なイメージ、すなわち華佗は外科術の開祖であるというイメージに惑わされているのである。『三国志演義』では、蜀の関羽の腕の外科手術などが生き生きと描かれているし、外科手術の記載が多い。また、華佗自身の死の原因も、「曹操の頭痛に対し外科手術を進言したため、謀反と考えられて獄死した」となっている。『三国志』による史実では、関羽の外科手術の記載はないし、華佗の死の原因も、曹操の度重なる出頭要請に答えなかつたため獄死した、というもので、両者の隔たりの大きさが分かるで

あろう。

そこで、『三国志』と『三国志演義』の医術についての記載の相違を比較検討し、両時代の医療技術について述べたい。

(インフォメーション・オン・デマンド株式会社)